
Blue Moon

早瀬 瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Moon

【Nコード】

N4845E

【作者名】

早瀬 瑠

【あらすじ】

人々が手を取り合い、笑いあう世界レヴィナスけれどもその平和を乱すことが起きようとしていた

くプロローグ

その昔、一つの災厄がこの世界を襲った

野を駆け、幾多の街を飲み込んで、とまる事がなかった

いつの日にか、もっと恐ろしいものが彼らを襲った

それは、動物とかけ離れた残虐で、獰猛で醜い姿をした生き物だった

人々が恐怖と絶望の淵に立たされたとき、彼らの中から立ち上がる若者がいた

若者は、片手に一振りの剣を

そして精霊達と、一匹の竜を共にし、その身をもって災厄を鎮めた

残った生き物達が逃げ出そうとしたとき、光が彼らの行く手を阻んだ

それは、この世界の女神 レヴィナス が放った光だった

女神は、一つの宝石を使って、彼らを地中深くに封じ込めたとい

第1夜

大公海には、連なるように国が点在しているといわれている

実際にこの目で確認したわけではない

ただ、時折訪れる旅人達から聞いた話だ

彼らは語る、この世界のどこかに伝説の大陸があると

そこには、この世のものとは思えないすばらしい剣が眠っていると

その大陸の名は、セレスティアというそうだ

彼らは、その大陸を見つけるため旅を続けているらしい

そう言えば、旅人の中が変わった人たちがいた

家族連れらしかった

旅人のことなど、いちいち覚えてはいない

けれど、彼らのことははっきりと覚えている

正しくは、彼らではなく、彼らとともにいた…幼い少女

いつも、夢の中に出てきて、手を振り続けて…

だけど、駆け寄ろうとしても少女には近づけない

視界にとびこんできた光景を見て、彼は不機嫌な声をだした

目の前に見えるのは茶髪の少年

愛嬌のある目で彼を覗き込んでいる

それなら、まだ許せるが、寝台の上で、しかも四つんばいになって自分のうえに覆いかぶさっている

切れ長の瞳を半眼にすると、彼は思いっきり蹴りつけた

「どけ、フレック！」

「ぎゃん！」

吹っ飛ばされたフレックは壁に頭を打ちつけそのまま地に落ちた
着地音とともにレイと呼ばれた少年はむっくりと起き上がった

「お前、誰の部屋にいると思ってる」

「きゅん。レイの部屋。…許可ぐらい取っているから」

頭を抑えながら、フレックは飄々と言ったのける

そんな彼を、黒髪の少年がにらみつけた

レイド＝アーントーク

それが、彼の名

「レ〜イ。しわが消えなくなっちゃうぞ〜」

ちやつかり胡坐をかいているフレックを見て、レイドは適当に、
手に触れたものを投げつけた

「うるさい。着替えるからさっさと出る」

「ぎゃいん」

投げたものは見事命中

再び頭を抱え込むはめになったフレックは涙ぐんだ目でレイドを
見る

「いいじゃん。男同士なんだからさ」

「でてけ」

げしつと、蹴っ飛ばすレイド

乱暴にしめたドアの向こうからフレックがぎゃんぎゃん騒いでいる

「ケチケチケチ！いいだろう？！ちょっとぐらい！お前風呂はいるときどうしてんの？！」

「よくない。…特にお前みたいなやつは」

「わんわんわん！」

「…すこし黙れ」

「きゅくん。きゅくん。きゅ…」
「がん」

何かが、何かにぶつかった

いつたいなんだろう

答えは、ドアとフレックがぶつかった音

開け放したドアから出てきたのはレイドだった

「レイ」

どこからか、くぐもった声が聞こえる

「これは、僕への愛のあか…」

「だれが」

最後まで言わせはしない

「やだな、つんつんしちゃっぶぐ」

ドアに力を加えて黙らせる

しかし、ここで黙るフレックではない

「えへへ、レイになら何されても僕はなんともいわないよ」

「Mか?!」

とりあえず、フレックを出してやる

「…」

開放されたフレックはじつとレイドを見る

一方のレイドは、首もとの黒い輪をいじりながら胡乱気に見返す

「何だ？」

「うに？…今日もいけてるなって」

「…は？」

「そんな風に地肌見せちゃだめだ」

「関係ないだろ」

フレックの頬に拳をお見舞いする

彼は笑顔でそれを受けた

「それより、なんでここにいる」

「あれれれ？昨日一緒に寝ようって言ったじゃんか！なのに、レイは冷たいんだもんもん」「気色悪い」

「んで、寝顔をみにきた」

親指を立てて言うフレックにレイドは内心、変体がと、つぶやくのだった

「だけ？」

「まだあるよ。…明日は何の日？」

「確か…、国立記念日だよな」

「正解」

それは、この国の女王を祝う日のことであり、この国の未来を願うひでもある

女王、アルテナ3世によって統治されているこの国は、1年中雪と氷に閉ざされ、不毛の地とされている

物資はすべて、他国からの輸入しているのだ

だから、何とかしてほしいと女神にすがっているというわけだ

「親父らは大変だろうな」

祈祷する際、この町はもぬけのからとなる

それを狙ったかのように、他国が侵略しにきたら大変だ

でも、そんな国はないだろうと思われる

いや、たった一国だけある

膨大な軍事力を持つ国

大帝国グランベロス

このごろ最近不穏なうわさが流れ出ている

戦争が起きるのではないかと

それは、できればただのうわさであってほしいとねがうばかりである

「…んじゃ、稽古だ!!」

「あ、ああ」

考え事をしていたので、わっと、万歳するフレックにあいまいな返事しか返せなかった

さっさと行くフレックの後を追いながら、レイドはあることを思い出した

「朝食は？」

「あ、まだ」

第2夜

朝食を終えた二人は、外に出て、剣の稽古を始めた
さすがに稽古なので、木刀を使っている

本当のことを言うと、二人は本物の剣を持っているが、それは現在進行形で内緒だ

「もらったーあっ！」

気づけば、フレックは宙に躍り出ていた

目を軽く見張るものの、それは一瞬のことですぐににやりと笑った
一瞬の出来事を見逃していないフレックは青ざめかけた

こういう時、レイドは必ず悪いことを考えている

そういう時は、下手に近づかないほうがいいと経験上での知識が教えているが、フレックは現在身動きがほとんど取れない

「ちよ、たん」

「まてはなし」

ガポン

フレックがボールのように飛んでいくのが、みえた

「また負けたあ」

さすがに疲れてきたのでちょっと休憩

とは言っても、疲れているのはフレックのほうだ

「お前、動きが大きすぎるんだよ」

「きゃうきゃう……」

「……………」

今日に至るまで、フレックの勝敗数は100戦中100敗0勝

「ここまで悪いと我ながらに笑っちゃうな」

「笑えるか。お前本当になる気あるのか？」

幼馴染である二人の夢は親衛隊になることである

「レイドは隊長の息子じゃん。勝てるわけないよ」

「あいな、やる前からきめるな……」

突如、言葉を切ったので、フレックは訝った

「レイ……？」

返事はない

ただ、どこかを探すように目が動いているだけだ

「レイ」

やはり返事はない

「レイ！」

「！…フレック？」

「どうしたんだ？」

「いや、別に」

「？」

「なんでもない。はじめぞ」

「わふ？…のお！待って！！」

「ここは、どこだろう」

広がっているのは、暗黒の世界

目の前に、ずっと先にあるのは小さな光の野原

そこには、少女が一人

自分に向かって手を振っている

近づいてみる

確かに近づけている

だんだんと、少女の顔が見えてくる

行つてはだめ！

誰かが、そういった
誰だ？

逃げて、早く！

逃げる？ いったいどこに逃げるといふのだらう
少女との間にあつた距離はまた縮まつていく

戻つて

あなたは、…に…に…に…に…に…に…に…に…に…に…
…は永遠に、あなたを…

何を言っているのかまづたくわからない
別にどうでもよかつた
だつて、今…

『ツカマエタ』

少女からそう、発せられた

それとは別に、背後に何かいる

『…ヨコセ』

『ホシイ…』

一人だけじゃない

複数

動けない

あるのは黒一色の世界

そこに転々と血のようにあかい目が複数
冷たかつた

仕方なく、寝返りを打つ

「……………」

寝たくない気分だった

寝たらまた、悪夢につきかまりそうになるから……

第3夜

その日は朝からにぎやかだった

「ふああ」

でかい欠伸をした後に彼は目をこする

結局、あのは寝ていない

「レイ、寝不足？」

隣にはフレックがいる

「…」

黙りこむレイドを見て、フレックは小首をかしげた

「レイ、このごろ変。よく黙るぞ…」

「そう、か？」

「うん」

どうやら、自覚していないらしい

十面を食っているフレックの横で、レイドはため息を押しとどめていた

本当は自覚している

あまり、悟られないように勤めていたのだが、さすがは幼馴染バレバレか…

思考の泉に浸っていると、耳鳴りがした

ぶつつりと、音がかき消される

聞こえてくるのは水の音

否、いくつもの固体が動き回る音

それから、うめき声

モウ、スコシ…

また、あの声だ

思わず耳に手をやる

ムダダ、モウ、オマエノ…

聞きたくない

けれど声は直接、脳に響く

スグソバニ…

それ以上は聞こえなかった

フレックが騒いでいたからだ

気づけば、自分は周りの大人たちに囲まれていた

彼らは口々に何かを言っているけれど、聞き取れない

「しばらく、休ませたほうがいいだろう」

誰かが、そういった

でも、いったい誰が

同じように感じた彼らが声の主を探す

誰かが、あつと、声を漏らす

人々の視線が一点に注がれる

そこにいたのは、一人の男

「なんだ？私は見世物でもないぞ」

真顔で、男は不平をもらした

「…ひゃあ。レイにちよつと似てる」

小声でフレックが感嘆する

「そうか？」

「うん。特に輪郭とか」

「どこを見ているんだか」

男は、二人のやり取りに目をくれずに、周囲の人々を追い払った

完全に散った頃、男は始めてこちらを向いた

「どうやら、なんともないようだな」

「あるはずない」

「ふ。…そうか」

「ところで、あんた誰？」

フレックが言うと、男は少し、面食らった顔をした

「人に名を尋ねるときは、自分から名乗るのが礼儀であろうっ？」

「…フレック・ルヴィウス」

むっとするが、フレックは答えた

「レイド・アーバンクル」

そう、言ったとき、かすかだが男は目を見開いた

「それなら、私も名乗らぬわけにはいかないな。私はクラウド・ロ
ジェルス。旅の傭兵だ」

「へえ… いったいどうして？」

「女王に頼まれてな」

片目を眇めるクラウドだった

「…？」

二人はほとんど同時に顔を見合わせた

「あまり、気にするな」

「はあ」

そして、夜

裏手にある山の前で、彼らは集まった

祈祷だ

「…」

レイドはかなり後ろのほうにいる

フレックは前のほうだ

今頃、町の中では、衛兵が見回っているのだろつなと拉致もない
ことを考えながら、レイドは眠たくなる話を聞いていた

と、また耳鳴りがした

ムカエニキタゾ

半瞬遅れて、町のほうから爆発音が響いた

「皆さん、落ち着いて、非難しましょう！」

なだれのように彼らは動いた

たった一人を除いては

その一人は、ぼうつとしていた

「レイ！早く！！」

フレックが人ごみを分けていこうとするが、流れに逆らえず、飲み込まれていった

その一方でレイドは、ふらふらと、町のほうへと歩いていった

「レイーイっっ!!」

もはや彼は、気を失っているといっただけだった

「……」

ようやく我に返ったとき、目の前に広がっていた光景は、赤い光だった

ゆらゆらとゆれている

それが炎だとわかったとき、同時にいる場所を理解した

町の中だ

路上には、血の池が広がっていた

「うそだろう…?」

その場から逃げ出そうとすると、火が行く手を阻んだ

『ニガサン…』

その声に、レイドは硬直した

ぎしぎしと音を立てながら首を動かして、背後を見る

そこにいるのは赤い目をした、この世のものとは思えない生き物達だった

『コノヒヲ、マチワビタゾ』

第4

これは、夢だろうか？
夢であってほしい

目の前にいるのは、アーだのウーだのとうなっている
では、話していたのはこいつではないのだろうか
じゃあ、一体誰が…？

つらつらと考えていたとき、耳元で笛みたいな音がした
破れた袖から、赤い液体が流れ出る
そこでようやく痛みを感じた
気づけばあいつは、背後にいた

恐る恐る振り返れば、あいつの口や手からだらだらと血が滴り
落ちていた

「グルルル…」

「な、何なんだよ」

それだけ言うのが、精一杯だった
らんらんと赤い目が光る

「ガア！」

相手が吼えて、ひるむのを見て、それはケタケタと笑った
『サツサトシロ…ドレホドマツタトオモツテイル』

「…誰だ」

声はやつのほうから聞こえた

相手は、びくびくしている

「グルルル…」

低くうなると、そいつは宙に舞い上がった

「羽?!」

確かに、そいつの背には漆黒の羽が存在していた

落ちてくるのは目に見えていたが、足が根を生やしたかのように

まったく動かない

動けと、念じる

けれど、足は動かない

何をして、びくともしない

はっと、顔を上げれば、それはすぐそこにいた

まずい、と思ってもどうにもならない

「!」

レイドは、声にならない悲鳴を上げた

だから、言ったのに…

近づいてはだめだって

でも、

大丈夫よ…

「グウ！」

それにぶつかる何かがいた

白い狼

いや、狼にしてはやけに大きい

大きさは、馬とそれほど変わりはない

「ウウウウウ」

狼は低くうなる

『ジャマダ、シマツシロ』

ぱっと、あれは動く

けれど、狼は動かない

あれが、すぐ傍にまで来たとき、不可解なことがおきた

何の前触れもなく、弾き飛ばされたのである

『コヨイ、タイサンスルトシヨウ』

化け物の姿が霧散しだす

狼はだまっただままことの成り行きを見ていた

まるで、風に溶けるかのように、それは、いなくなった

それと、入れ替わるように足音が響く

ついつと、狼がそちらを向く

「…ご苦労様」

細い腕が伸びてきて、狼をなでる

「礼には、及ばぬ」

はつきりと、口を動かして、狼は言った

その言葉に、彼女はくすくすと笑った

腰よりも長い銀色の髪が、炎に照らされて、オレンジ色に染まっ

ている

長さが不ぞろいなため、右目を隠してしまっていた

「…」

視線を移して、その少女は倒れて微動だにしない少年を見た

「どうする？」

「今は…、このままでいいわ。…時がくるまで」

その、時が来ればすべてを告げよう

その必要はないかもしれないが、それまでは、知らないほうがいい

屈み込むと、少女は、名残惜しそうに少年の髪をなでた

じっと、狼はその様子を見ている

「覚えてる？…覚えてないわよね…。でも、…」

何の感情も見えなかった瑠璃の瞳になんとも言い表せない感情が
写る

言うなら、せつなさというものだろう

「約束は、ちゃんと覚えているから…ね？」

少女は立ち上がると、はるか遠方を見るような視線を投げかけてきた

「行きましよう」

何か言おうと、狼が口を開きかけたとき、少女が片手でそれを制
した

「彼が来るから、長居は無用よ」

それだけで、狼は納得した

少女を背に乗せると、狼は、炎の壁を軽々と飛び越えた

去り際に、少女は振り返る

「またね」

小さな声で、少女はそう、言い残し、やがて、夜の闇に溶け込んで
いった

第5夜

なぜだか、体が上下に揺れている

「…ん？」

景色が流れているのはなぜだろうか

鉛のように重いまぶたを無理やり開けて、レイドは自分の置かれた状況を見た

「気づいたか」

上から声が降ってくる

えっ、と思つてレイドは、声のしたほうを見た

ぎょっ、とした

「クラウド！」

彼の片手が自分を支え、もう片方の手が何かを握っているのが見える

それは、手綱だ

そして、自分が今座っているのは紛れもなく馬の背だった

改めて、クラウドの顔を見る

瞬間、気を失うまでのことが一気によみがえってきた

「フレックは?!」

「無事だ」

「じゃあ、あの…」

「警備兵は全滅。襲来した魔物は姿をくらませた」

聞こうとしたことをすべて、それこそ、心中を読み取ったかのようについて答えた

「悪いが、お前の身柄はこちらで保護させてもらう」

そんなことを言われて、レイドは混乱した

そして、また心を読んだのか、彼は厳かに口を開いた

「私の言った用とは、このことなのだよ…」

ほんのりと、一瞬ではあったが、クラウドの瞳が悲しみの色に染

まっていた

そう、レイドは思った

「どこに？」

「アルテナ女王の元へ」

アルテナ城のはるか東の上空から、二羽の大鷲が舞い降りてきた城の上部に大鷲は見事着地する

その、一羽から、人が飛び降りた

「…まったく、王も人使いが荒い」

むすつとした顔で言つてのける青年はもの音を聞きつけて、そちらを見る

「はるばると、遠方からようこそお越しくございました」

出迎えたのは、数人の侍女を従えた中年の女性だった

「これは…、女王陛下直々のお出迎えとは、光栄です」

礼儀正しく、その青年は会釈する

アルテナ女王は、踵を返すと、ついてくるよう促した

「陛下、率直ですが、御用とは？」

ぴたりと、女王の足が止まった

「万が一のときのためです」

「…」

再び進行する

こりゃ、面倒なことになりそうだな

内心、その青年は思ふのだった

玉座の間へと通された青年は居心地が悪くて仕方なかった

通路を囲む騎士達はじろじろ見てくるし、中には殺意をむき出しているもいた

「たのもしい騎士ナイトだことで…」

皮肉たっぷりな言葉を青年はだれにも聞こえないように小さな声で言った

「さて、こちらに来ていただいた理由をお話しましょう。例の噂はとっくにご存知ですよね…?」

「…もしや、あれが…?」

胡乱ケ気に聞き返す青年に女王はうなずいた

「先ほど、連絡がありました」

「……」

「おそらく、帝国も動いていることでしょう。もし、この国で戦争が起きれば、我が国の敗北は目に見えています。そこで、ローラントの方でしばらく預かってもらいたいのです」

「話の内容はわかりましたが、あれは人間です。おとなしく、言うことを聞いてくれるか…」

「その点の心配はいらないかと…」

その時、侍女がやってきた

「たった今、ロジエウス殿が戻ってまいりました」

「通してください」

「わかりました」

去っていく侍女を見送りながら、青年は口笛を吹いた

「どんな子、なのかね…」

先ほどの侍女が戻ってくる

後ろに、男と、少年を連れて…

「クラウド・ロジエウスただいま、戻りました」

それを聞いて、レイドはクラウドの服のすそを引いた

「クラウドって、本当は騎士?」

「違う。私は傭兵だ」

「…すごい主張…」

ある意味大人気ない

「お待ちしております…」

女王らしき人物がそう、言う

その下段

自分達の目の前にいる青年が観察するように見てくる

燃えるような赤い髪をしていて、肩よりも長い

睨み返すと、青年はおどけたようなしぐさをして見せた

「さてと…」

何かを言おうとしたとき、勢いよく侍女が飛び込んできた

かなりあわてているようだ

「どうしたのです？」

「た、た、た、た、大変でございます！今、帝国からの使者が！！」

わっと、どよめきが流れる

「静粛に、続けて」

「それで、今、こちらに…」

言い終わらないうちに、侍女が来たところから自分と変わらない

年の騎士が入ってきた

クラウドが手を伸ばして、道端にずれ動く

青年も同じ動きをする

その騎士と目が合ったとき、彼は驚いた顔をした

「…レイド？」

「え…？」

騎士の足が止まる

そのまま、二人はなんともいえない顔で見詰め合った

「なんでして…」

「レイドじゃないか！10年ぶりだな！」

この言葉に一同は口をあんどくりとあけた

当の本人もまた、そのうちの一人である

「あ、あの、…どちら様？」

「…はへ?!」

今度は、騎士が衝撃を受けるばんだった

「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい!! ああ、もう何回言った?! 自分でもわかんねえ! つうか、久しぶりのだちにあつた第一声がそれか?!」

爆弾宣言に全員が硬直

もはや、石像ともいえる

ほんの数名を除いては

その数名であるクラウドは無言のままあさつての方向を見ているし、赤毛の青年は面白いものを見つけた子供のように続きを待っている

そして、レイドはといえばどう対応していいのかわからず途方にくれていた

それを見て、彼は口をパクパクしながら、記憶を掘り返させた

「覚えてない?! 昔、三人一緒に鷹の卵とりにいったら?! その時がけに落ちて、んで下流でパンツいっちょになって、つりしただろ?! それから、村の野郎にいったい食わせようと、落とし穴を作つて引つかからせただろ?!」

「…?!」

なんだかすごい方向に話が行っているぞ…

「まだあるぞ! 森に行くんだんだで行ったのはいいが、迷子になつて拳銃の果てに馬のクソの山に突っ込んだだろ!! まだまだ!」

「もういいです」

「思い出しかあ!」

「…」

「違うのか?!」

こつくりとうなずくと、一気に暗くなった

「…俺が、馬鹿だった…」

「!?!」

いきなりなにを言い出すのかと思えばこれか

女王が咳払いして、何とか果てしない講話は終わった

「それで、何用ですか？」

「おっと、そうだった。私は陛下からの言伝を伝えに参ったしだい」

「それで、なんと？」

「…これを」

彼は、すつと、何かを取り出す

「どうやら、手紙のようだが…」

侍女が受け取り、アルテナ女王に渡す

中を取り出して、文字に目を走らせる

「…帝国からの使者よ。行ってお伝えください。却下だと」

「そのときはどうなるか、お分かりですよね？」

「…なんですって…？」

再び彼女は目を走らせる

「…一体」

「私は単純に一般兵です。詳しいことはしりませんよ」

しれつと言つてのける騎士に女王は顔を険しくしたが、冷たい声

音で淡々と言つた

「却下です」

「では、そのようにお伝えしましょう」

くるりと踵を返す

その際、彼はレイドにしか聞こえない声で話しかけた

「またな」

「お、おい…」

「ロキだ。覚えとけ」

「あ、ああ」

そのまま、彼は行ってしまった

しばらく、間をおいて、女王が語る

「事態は深刻なようです。ローラントからの使者よ、彼らを、お頼

みます」

「御意のままに」

ペこりと、青年が頭を下げた

「それで、ロジェウス殿は……」

「できれば、同行させていたいただきたい」

「では、そのように」

その時、外から甲高い声が響いた

窓の外を見れば、一匹の何かが、飛んでいた

第6夜

物事が怒涛のように流れていって、レイドはいい加減うんざりしてきた

なぜ、自分はここにいる

なぜ、クラウドは何も教えてくれない

唯一の頼みの綱であるクラウドにありとあらゆる疑問をぶつけてみたが、黙るか、あとでな、などといって、何も答えてはくれなかった

ちらりと、レイドは隣の青年に目を見やる

視線に気づいて、青年がこちらを向き、にやっと笑った

「なんだ？」

「べ、別に……」

おもわず、そっぽを向く

「はーん。本当かねえ」

はにかんだような顔をして、その青年はじろじろと見てくる

一方で、クラウドはまったく気づいていない

「悩みがあるなら、俺様に言ってみな」

「……」

なんでこう、どいつもいちいち当てるのか、疑問に思わされた

「なんでって、顔に書いてあるから」

「?!」

「いやあ、レイド君って意外と顔に出やすいねえ。ってありやいや、すねちゃった？」

「べっ」

「まあまあ」

「行かないのか？」

クラウドが割って入った

「行くよ。んじゃ、さつさと乗った乗った!」

青年は手をひらひらさせる

うなずくと、クラウドはレイドを伴い、鷲の背に、まずレイドを乗せ、続いて自分が飛び乗った

その身のこなし振りを見て、青年が低くうめいた

「あんた、なれてるだろ」

「まあ、昔に少し経験した程度だ」

「ふーん。には、みえねえけどな…。ああ、自己紹介が遅れてた」

簡単に声音を変えてみせる青年に、レイドはある程度の違和感を感じた

「俺様はレウ・ハルセルフ。よ・ろ・し・く」

ずいぶんと色気使ったな

それに対して、クラウドは実に淡々と言った

「クラウド・ロジェルスだ」

レイドも、口を開きかけたとき、制された

「知ってるぜ。レイド君」

「あ」

そいえばさつき、そう呼んでいたな

って、なんだか変な気分だな

「んじゃ、行くぜ」

前に一回、本当に一回だけ空にあこがれたことがある

翼あるものに跨って自由自在に空を駆け巡る竜騎士ドラゴンナイトに飛翔騎士ファルコンナイト

あの頃は、あこがれていた

そう、あの頃は…

では、今は？

現状は最悪

なんで、あこがれたんだと頭を抱えさせられている

「気圧変化で耳がおかしくなっているし、手足もがちがちだ

「……」
それに対して、クラウドは無言で何の変化もなく、レウは口笛を吹いていた

「レイド君、ひよっとして寒い？」

「……」

沈黙を肯定だとみなして、レウはピースした

「もう少しの辛抱だよん」

「……」

もっと、ましなポーズでいえよ……

やがて、鳥達は徐々に降下していった

眼下にあるのは瑠璃色の世界と、緑色の大陸

帝国に次ぐ勢力を持つローラント大国

「国土はアルテナの約二倍。自給率がかなり高い国だぜ」

すぐ隣でレウが赤毛を風に靡かせながら言う

「へえ……」

相槌を打った時、目的地はもう目と鼻の先だった

ローラント城には、戦鳥のための大きなテラスが上に設置されていた

迷うことなく、そこに着地し、降りたときだった

レウが、たじろぐのと、クラウドが顔に険を宿すのはほとんど同時だった

「ありやりや……」

「ずいぶんとした出迎えだな」

三人の前には、一人の女性が鞭を構えていた

その後ろに、二人の従者を連れている

首元で一つに結った薄茶の髪が風にたなびく

「捕獲しろ」

一言、その女性が言うと、従者はぱつと、二手に分かれた

無言のままクラウドが剣を引き抜く

その隣でレウが腕をレイドの前に突き出した

「正面からなんて…、ずいぶんと見下されたな。レイド君は下がって」

レイドは、黙って指示に従う

その際、レイドは不思議なものを見た

レウが取り出した剣はなぜか緑色の光に包まれていた

いや、剣そのものが光であった

クラウドがそれを見て感嘆する

「魔法剣か」

「あつたり〜」

「なにそれ」

間髪を入れずにレイドが問う

すると、クラウドが答えた

「魔法剣とは、その名の通り魔法の力を持つ剣だ。魔法にはそれぞれ属性があり、使い手の本来持つ属性フレイジャーにのみ扱うことを許されている」

「ちなみに、俺様は陣〓風〓《ジン〓ウィングダム》だ。だから、こいつの属性も陣〓風〓」

「はあ…」

さらにと、クラウドが補足をする

「この世のすべての人は必ずいづれかの陣を持っている。と、これより詳しい説明は後だ」

ひゅつと、剣を一閃させる

続いて、鮮血が吹き上げた

その隣でも、同じことがおきていた

従者は体中を切り刻まれ、尚も、息があった

わざと、殺さなかったのだ

瞬時にレイドは、レウの考えを理解してしまった

クラウドは、苦しまず、いや、即座に終わらせる方法をとるけれど、レウはそれをしない

死に至るほどの傷を負わせ、動けないようにさせる

そして、苦痛にあえぐ姿を見て楽しむのだ

「ずいぶんと、悪趣味だな」

クラウドが、剣についた血をぬぐいながら言う
と、レウがそちらを見て、ふつと笑う

「おやおや…。ま、このくらい当然さ」

次の瞬間、レウの顔から笑みが消え去った

変わりに、氷のように冷たい光が宿った

「苦しいか？今、楽にしてやる。…第一形態解除」

その光景に、レイドは思わず顔を背けるのだった

クラウドは微動だにせず、もはや人であるかさえわからないも
のを見下ろしていた

「ばかな…」

かすれたうめきは、女性のものだった

「あんたが首謀者だろ？おとなしく縄にかかれ」

レウが駆け出す

けれど、その足を止められた

煙だ

「ゴへ、ゴへ、ゴフ、前がみえねえ…」

涙目になりながらレウが言った

どこからもなく、女性がレイドの前に現れる

「しまっ…」

クラウドが動くが、それよりも女性のほうが早い

「お前が《エリエゼル》か？なら…」

はっと、女性の身が横に行く

「引け。ここはお前のような裏切り者が来る場所ではない」

凜とした声は別の女性のものだった

この場にいたものの視線が一点に注がれる

そこにいたのは、短髪の女性

鋼のような黒髪を切りそろえている

「セリス…。なぜここに」

「それは、私が聞きたいよ。なぜお前がここにいる」

セリスと呼ばれた女性は食いつくような目で見返す

「まあ、いいさ。いずれ回収命令が下される。せいぜい守ってみることだな…」

そう、言い残すと、女性はつむじ風のようにいなくなった

「…怪我はないか？」

「セリス、遅い…」

両目を真っ赤にしたレウが言う

その姿を見て、セリスは哀れむような視線で返した

「許せ、こちらも襲撃されたんだ。…気づかれたのも当然だが」

「何が？」

「別に」

「？」

視線をそらしたとき、たまたま、レイドと目が合った

面食らった顔になるが、セリスはすぐに微笑んだ

「ようこそ。風の国ローラント大国へ…」

第7夜

空には、月がかかっていた

テラスに出て、クラウドはこれまで我慢していたため息を漏らした

「……」
無意識のうちに腕がある方向へと伸びる

そこから、あるものを取り出した

それは、黄金色のロケットペンダントだった

チエーンを掴み、目の前で揺らす

反対の手で軽く、親指をはじくと、簡単に開いた

しばらくの間、クラウドはそれを眺めた後、大事にしまいこんだ

背後から、足音をしのばせる気配があったからだ

「生き別れた家族の写真か？」

振り返った先にいたのはレウだった

「何だっつかまわないだろう」

「言っと思った」

大仰に肩をすくめて見せる

「なぜ、足音を消そうとした？」

「…驚かそう、と思ってる」

「…」

「何か、ものいいただなあ」

「いや」

語調をまったく変えずに言うクラウドに、レウは疑いのまなざしを投げかけた

「そっぴゃあ、レイド君が探していたっけ？」

「失礼する」

言い終わらないうちにクラウドはさっさと行ってしまった

足音が完全に遠ざかる頃、レウは表情といえるものをかき消した

「嘘言ってるのは、バレバレなんだよ…。いつか、引きずるぜ」

その、月の明かりだけが、すべてを飲み込もうとしていた

「いいかあ、レイド君。前回の復習をどうぞ」

「…え？」

いきなりそんなことを言われても答えようがない
それよりも、前回とはいつのことだ

ひよつとして、あの戦闘のときに言ったことか？

「ええと…」

「はい、時間切れ。レイドくん。ちゃんと復習しなさいっ！」
そんなこと言われても

「昨日の今日だけど。それに、まだ五秒…」

「シャーラアアップツッ！！」

大声で、レウが言った

いつの間にか、黒板らしきものが背後にある

……幻覚か？

ちなみに、この場にいるのはクラウドとセリスだ

クラウドは、後ろのほうで壁に寄りかかり、話を聞いている
いや、素通りしているかもしれない

セリスはすぐ傍でひざを組み、呆れ顔で聞いている

「魔法にはそれぞれ、個々の属性を持っていて、人は誰しもそれを
持っている！」

「聞いた」

「…んで、その属性なんだけど。はい、クラウド」

そこで、レウは突如クラウドに振った

指名された本人は訳がわからんという顔をしたものの、ちゃんと
答えた

「属性には層というものが存在している。上からファーストエイド、セカンドティア、サードフォルだ。それぞれの層は、一番初め、すなわちファーストエイドから生まれている。ちなみに、ファーストエイドの魔法の属性は陣ジン 光と陣ジン 闇ダークネス。この二つは最上級ランクの魔法で、これをもっているのはそうそうにいない。そして、この二つには、ほかのいかなる魔法であっても倒すことは不可能だ」

「魔法の中の王様みたいなもの？」

「そうさ」

「答えたのはレウだった」

「そして、陣ジン 光ライトから陣ジン 水ウォーターと陣ジン 風ウィンドが、陣ジン 闇ダークネスからは陣ジン 土ソイルと陣ジン 炎フレイムが生まれた。それがセカンドティアに入っている陣であり、四大元素とも言われる魔法だ。こちらのほうが、なじみがあるだろう？ だけど、これをもっているのは1000人に1人の確立だ。そして、サードフォルこれはすでに多発している。なんせ、10人全員がいずれかを持っているもんだからな」

「いずれか？」

「そうだと、セリスがじれったそうに言った」

「サードフォルに含まれる陣は力パワー、知恵ウイズドム、勇気カレッジ、動ムーヴなどと、あげたらきりが無い。その中で、四大元素を色濃く持っているとするれば、

陣ジン 木ドリアーサン、陣ジン 氷ヒューズ、陣ジン 雷ボルテックの三つだけだ」

「へえ……」

「相槌を打つものの、まったく理解不能」

「そういえば、レウは陣ジン 風ウィンドだよな……」

「まあね〜」

「じゃあ、クラウドは？」

「二度も指名されて、クラウドはうんざりだといわんばかりであった」

「……さあな」

「？ 何で知らないんだ」

「確認しないままの人もいるんだよ」

「セリスが何か意味ありげな目でクラウドを見ながら言った」

「なんで？」
「さあな」

第8夜

「んで、何で俺はここにいるんだ?!」

「いや、それは、かくかくしかじか…」

両手を挙げて、レウがなだめようとするものの、レイドは聞く耳を持たない

「そろそろ本当の事を言ったらどうなんだ?!」

「俺様に言われても・・・」

「お前も一枚絡んでるんだろ?!」

「う・・・」

返答に詰まる

「それに、あいつが回収するとか言っていたけど、何なんだよ」

「…なあ、本当に知りたいなら…カーナに行った方が早い」

その時、背後で息を呑む気配があった

レイドはもちろんのこと、レウも気付いていなかった

「カーナ…」

「行く、か…? って聞くまでもなさそうだな…。…俺様もついてっ
てやるよ」

退室した時、横から声を掛けられた

「なぜ、あんなことを言った」

その声音は冴え冴えとしていて、責めているようであった

「別。黙っているよりはましだろう?」

「レウ! お前何をしたのか分かってているのか?! あの子供が、もし知ったらどうなるか分からないぞ!!」

「セリス、…遅かれ早かれ知ることになるんだ。今知っておいた方

「がいい。…それに、あれはそこまで弱くない」

「ぐつと、セリスは唇をかんだ」

「なら、私も行く」

目を伏せ、レウはその場から立ち去った

その背後を一瞥した

「もし、堕ちたら・・・？」

「その時は、どうすればいい？」

「クーラーウード！。なぜに不機嫌？」

「自分の胸に聞け」

おどけた調子のレウにクラウドは殺気をかなり放っている

おまけに目が完全に据わってしまっている

「鼓動しか聞こえねえな…」
「ばこっ」

もの見事にレウの頬が赤くはれた

「なあにすんのよっ」

「黙れ」

「カリカリすんなって」

いつもの冷静ぶりはいつたいたいドコへ…

「ここまで変貌されると、違和感どころの騒ぎではない
もっとも、本人は気付いてないかもしれないが

…」

不意に、レウの顔が引きつった

その目に映ったのは、クラウドの背後でうねるとす黒いオーラだ

…

「く、クラウドさん?! はい深呼吸」

…」

無言のまま剣に手を添える

それを見て、レウは度肝を抜かれた

「ちよっ…。まじ、キャラが変わってるし!!」

そこに、救いの手が差し出された

「何してるんだ…?」

呆れた顔をしたセリスがいた

その側に、理解不能と顔にだすレイドの姿があった

女子供に情けないところを見られた大の大人二人は沈黙になった

いろんな意味で最悪なほうに転んだと思う…

腕を組んだセリスから、思いもよらない言葉が飛び出す

「おい、とつとと行くぞ」

「?!」

全員が目を丸くしてその人を見る

一方、見られた側は心外だといわんばかりである

「ああ、セリスは切れるとああいう言葉遣いになるんだっけ…」

言いながら、レウの脳裏に最悪の記憶が走馬灯に駆け巡るのだった

「と、言うわけで行ってきます」

「待たんか!なんだそのお使いに行ってきます的発言は!?!」

許可を得るため、玉座の間に通されるなり爆弾投下するレウと若き国王陛下

その周りにははらはらしながら見守る兵士の姿があった

「真実、お使いです！」

「嘘付け!!!」

「…チツ。ばれたか」

今、明らかに舌打ちをした

「やっぱりそうなんだろ?!どこに行く気だ!!!」

「カーナ。文句ありますか？」

「威張るな!!!と。いうより大有りだ戯け者!!!」

「え〜。なんで、なんでえ？」

「おい、色っぽい声出すなよ…」

「いいんだいいんだ!!…国中に恥ずかしい写真ばら撒くぜ」

悪魔モード、スイッチオン

「!!!!!!」

王が絶句した

それと同時に兵士らが一步引く

いや、一步というレベルではない

「…っ」

不意に、王の顔に不適な笑みが広がった

「くくくっ。だったら、貴様のあの話をここにいる連中にはらす

ぞ!!!」

「!!!!!!」

今度は、レウが絶句する番であった

「ほほう、俺様を脅すとはいい度胸じゃねえか…」

「何だ?やる気か…?」

殺気を大量に放つ二人の周りには、冷や汗をかく兵士らの姿が…

『俺、軍から出て、真面目に畑を耕そうかな…』

そんなことを考えてしまう兵士らであった

実はこれ、今日が初めてではない

ほとんど、毎日のように繰り返される口論

最終的には暴力で解決しようとしたし、そこに決まってセリスが現れて、罵声、または魔法を飛ばし、長々と説教を食らわすと言うお決まり事に近い現状であった

そして、今日もまた、セリスが…、魔法を発動させた

「ゆらりゆらりと、躍り、舞い上がれ…。ファイラ」

瞬間、陰険な空気を漂わせていた二人の周りに炎が舞った

「うぎゃああああ!？」

文字通り飛び上がる二人に、容赦なくセリスの罵声が投げられる

「何やってるんだこのくずどもが!!!」

「ひいっ!!!」

セリスの気迫に二人が引いた

「そこに直れ!!!」

素直に二人は正座する

「まったく、余りに長いんで来て見れば…いい年して、餓鬼染みた喧嘩をしゃがって!!!お前らそれで、国やっていけると思ってるのか!ああ!!!?」

果てしなく暴言に近いそれに、首をすくめる

余談ではあるが、セリスは切れたときにだけ、言葉がかなり荒れるそれでも、謹んでいるが、この二人とあっては情け無用

「反省してます」

声を揃える二人に、セリスは恐ろしい形相をとった

「ああ?おめえら、それで反省しているつもりか?...それともまだ、たんねえのか?」

魔力を高めだすセリスに二人は必死にやめるよう懇願する

「だったらよお。ちやっちやと許可よこせや。てめえもてめえで、
ぐずぐずしてんじゃねえよくずが」

王の権力はいったいドコへやら…

青い顔をして、二人は何度も何度も首を縦に振るのだった

ちなみに、それを外で聞いていたクラウドとレイドは、セリスの
豹変振りに硬直していた

第9夜

しびしび頷いたものの、鳥に乗っていけという王の言葉を見事に却下し、ここより西にある港町、ルルドへと移動するのだった

といっても、さすがに徒歩ではいつになるのか分からない

けれども、この国に馬はいない

かわりにいるのは、やはり鳥だ

「・・・」

ご対面したレイドはそれを見て、見事に絶句した

なんとというか、無駄にデカイ気がする

一見、鶏に見えるが、大きさは馬並みである

「あれ、スエッグって初めて？」

「・・・」

話には聞いていた

けど、これほどまでとは・・・

とあたりで、クラウドもぽかんとしている

「・・・実物は、はじめてだな」

とのご感想

扱い方は馬と一緒にらしいが、その足の速さは馬の比ではなかった
なんというか、竜巻に巻き込まれた錯覚に陥る

・・・考えたら余計に気持ち悪くなってきたな

青い顔をしているレイドとは対照的にレウは楽しんでいた

その後ろにセリスが涼しい顔で続いている

「驚いたな・・・、ローラントの連中は化け物か？」

発言したのはレイドのすぐ後ろにいるクラウドであった

盗み見ると、そういうあんたもなと、レイドは突っ込んだ

そして、思考の淵に沈みこむ

今頃、村人達はどうしているのだろうか、父は無事なのだろうかとか、何よりも心配なのは親友の事

最後に見たのは慌てふためいた顔

「・・・クラウド」

前を走る二人に聞こえないほど小さな声で呼ぶと、同じく小さな声で返事をされた

「なんだ？」

「・・・なんで、助けた」

「さて」

「さて、って・・・」

「・・・見えてきたぞ」

そういつて、彼は話を打ち切った

目的地であるカーナへ行くには、海を渡る必要が有る

そのため、港町であるここへとやってきた

それは、いいのだが

「だー。どこも、ださないつてよ」

疲労困憊という、ウル

彼の言うように、どの船も出港をするつもりはなかった

帝国の兵がうようよしているというつわさがあるのだから仕方な

いじつ

誰だって、命は惜しいものなのだから

「・・・まいったなあ、ファルコンは使えないし」

ドラゴンに乗っている帝国兵に見つかればもう、おしまい
なぜなら、飛行能力、殺傷能力、すべてにおいてドラゴンの右にで
る生物はまずいない

散々唸っている矢先に、1人の男が現れた

「お前ら、船に乗りてえんだろ？だったら、オレの船に乗せてやる
よ」

「・・・お、マジ？」

ウルが、乗ったがどこか疑っているように見える

「まあな、やることきちつとやってくれるなら、いいぜ」

「・・・だとよ」

悪くない話だが、どうも都合がよすぎる

どこも出たくないというのに、なぜ彼は出るのだろう？

なぜ、困っていた矢先にちょうどよいタイミングでくるのだろう

「・・・帝国兵ではなさそうだ」

「なら、海賊か？」

ウルとクラウドが、小声でやり取りをしている

「かもしれない」

「おいおい・・・。俺ら三人はいいけど、あの坊ちゃんは・・・」

「それなりに、腕は立つ。自分の身ぐらいは守れるだろうさ」

「その自信はどこから・・・。ま、いいや」

ウルが、前に進み出た

「その条件、乗った」

にやりと、二人は笑った

視線が交差する際、わずかながらに火花が散ったように見えた
「交渉成立」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4845e/>

Blue Moon

2010年12月11日04時10分発行